

# 水牛通信

50円

## 号外

人はたがやす  
水牛はたがやす  
猪は音もななく育つ

### 海外のみなさんへ

一九八〇年五月二十三日 午後六時

私は現在の光州市における危機的状況について、私のつたないレポートを読まれることと皆さんに切にお願ひします。私は外国人の報道者が私たちの市の悲劇の重要な光景を充分に伝えていないのではないかと恐れています。あはたたち（外国人報道者）はエルサルバドルやウガンダの状況と同様に、詳細かつ生々しく報道されているでしょうか。

私は、光州市の女性市民です。私は政廳司令当局によって逮捕されることをもいとわない決心をしています。どうか私の安全も考慮して下さいるようお願いいたします。

まずはじめに強調したいことは、私の家族はどれも朴政権および継承者に危害を加えられていないということです。したがって、私の言葉は客観的であり真実であることと信じて下さい。私はここに物的証拠を示すことはできませんが、もし皆さんにテロピーという人間の心をつなげるものがあるとしたら、皆さんが私を信ぜずにはいられないと確信しています。どうかこの手紙を信じて下さい。五月十八、十九、二十日の空挺部隊の残酷な行為はとも信じられぬほどの残虐さでありました。

十九日の朝、私の父は（空挺部隊の兵士が）二階建の屋根から負傷した人々を投げ殺しているのを目撃しています。同じ頃、銀行の近くで私の母が、若いデモ参加者が棍棒で頭を叩きつぶされ、脳おいが露出してしまった場面を目撃しています。しかしこれらほまほ残酷な行為の中でも比較的ましなほうです。私は、このような死臭のた

だよう愛国気のおかげ、残酷な場面を目撃する勇氣をもつ人が果している。どううかと疑うくらいです。彼ら（空挺部隊）の行爲があまりにも残酷で非人間的なゆえに彼らの行爲は長い期間かけて洗脳され、二三日飢餓状態にみかれ、アルコールと覚醒剤だけを飲まされたことになってなされた行爲としか理解できません。

私は、幾人かの執事（キリスト教会の役員）がこのような残酷な行爲は、一九五〇年の韓国動乱（朝鮮戦争）のときにもなかつたと発言したことが、市民感情を奮起させたと思像しています。私たちは吸血鬼集団ともいえる空挺部隊が、殺した数多くの市民の死体を焼いたりしてかくしたと信じています。

現在の光州が学生と市民勢力によって占拠されるようになった決定的なできごととは、学生のデモ隊を運んだという理由で4人の同情を殺された職業運転手の一団の怒りのみならず、彼らの車による抵抗によって焼かれています。

私は、二十日の夜からなされた道庁前での抵抗運動を目撃しています。二十一日の午後一時頃、無差別の銃撃がはじまりました。十歳位の子どもが射ち殺されました。（警署の路地で目撃）。また、フンナムホテルのロッキューは、

働いているところを殺されました。

私は道庁会館前の広場での市民集会、示威運動に二十一日の午後七時十分まで参加しました。私は学生指導者の総幹事にシヨックを受けました。私は自由と民主主義がこの集会に昇現化されていたことを誇りに思います。学生の指導者たちは、自分たちを北から来たスパイであるというように疑ってはならないと、私たちにむかって力説しました。そして、日本やアメリカの放送を聞かないこと、そして、聞いたりしたということではなく、自分自身が目撃したことのみを話すようにと注意していました。学生たちは「われわれは金大中という特定の個人のために闘うのではない」と言っています（彼らの当局に対する要求項目の中に、金大中という名は一字も含まれていませんでした）。

抵抗運動の主要勢力は、全く秩序のとれた行動をとっていません。たとえ、市中の中央警察署は、少なくとも三度にはわたって戦車が市民を制圧するためにやって来るという程度の興奮状況のなかでさえ攻撃されませんでした。MBC放送（文化放送）局が、原因不明の火事にあえわれた時に、学生たちは消化に努めていたことを、私の妹が目撃しています。

今、私たちは光州市民は誇りに思っています。しかし同時に私たちは恐しい機五感を感じています。正義の堂にたは、夜がしのび寄ると感じることができず、いいます。これは、主にマスコミの海外報道が、私たち期待以上に弱く、皮相的なものでしかないので、ソウルからの放送は虚偽と不誠実に満ちているので、私たちを驚愕させました。もし報道がいまわしい検閲によるものでなかったならば、私たちの闘いはすでに成功を収めていたであらうでしょう。私たちは一九六〇年の4・19革命とは比較にならない悲状況のもとにさらされています。私は、いまだかつて市民の生存と自由のための抵抗がこのような不道徳なつかいを受けたいということを知りません。私たちはこのような危機的瞬間にもかかわらず北韓からのスパイたちが仲間の中に浸透するのを極度に警戒しています。私たちは少数であり孤立させられています。

全斗煥將軍は、先の朴大統領とは大きく違っています。多くの国民は朴正熙の度重なる失政にもかかわらず、彼の死にあっては涙を流しました。しかし、全斗煥が打倒されるならば、ウガンダの国民がアミンから解放された時のような解放感を私たちは味わうことができずでしょう。鎮(全斗煥)

半端)は吸血鬼がさもなくば、少くとも果敢な性格の持ち主としてかと思えます。もしそうであるならば、あのような吸血鬼(空挺部隊)をどうしてあやつることができずののでしょうか。私たちは全斗煥のこのまゝの道は、海外逃さか、さもなくば弾圧政策を強化して光州市一帯の市民の大虐殺を行うほかはないであろうということを知っています。

私たちは在韓米軍の司令部がこの国における軍事行動の窮極的な命令権を持っているという理由から、米韓連合司令部が結果的に私たちの悲劇に責任があると分析していますが、理由のないことでしょうか。もし、全斗煥によって危害と非秩序がこの地域に再びもたらされるならば、全ての光州市民は、死者への哀悼の気持ちから激怒をもって武装するであらうでしょう。そしてアメリカの最友好国である大韓民国は国境の道をたどるかもしれません。そのような見通しを持つことはほんとうに恐ろしいことです。

特に私は、ヌウムとニュースウィークが可能なかボリのヘーリをさいて、光州の軍態を報道してくれることを望みます。なぜならこのふたつの雑誌には多くの韓国入読者がおり、人々は検閲によってしか知られていない歴史の

— 3 —

空白部分の大きさから、私たちの悲劇の大きさを知ることが出来るからです。私たちは、私たちの悲劇と現在の危機をどうしても知らさなければならぬ必要性を痛感しています。

私たちは、私たちの自由が私たち自身の手によって勝ちとりなければならぬことを知っています。しかし、そのことを私たちの若き闘士たちのために千度でも訴え、祈らなければなりません。

伝えられるところによりまると、ソウルおよび他の地域から多くの学生たちが、光州地域を包圍している軍隊の戦線も終度も継続して突破しようとして撃たれたということです。

私たちはまた、死亡した兵士も私たちの同胞（はらから）であることを忘れてはいません。少数の反逆者によって、なんと大きな悲劇がもたらされてしまったのでしょうか。

このことを報道してくれる人に感謝をさげると同時に、幸運をお祈りいたします。

## 引き裂かれた旗

（五月十九・二十日） このかきこびるこびる叫び声

悲鳴、臨終を告げる細きさくさくした声、声、声……

大地は口をあけて若り魂がしほり出した血を吸って酔いほいぬている。

天はこびまする喊声で乱れ裂けている。

デモをする学生たち、街頭に立ちならんでいた市民たちは逃げる間もなく空挺特戦隊に包圍され、死を待つことになりまわっていた。

まさか、なにもしない良民を殺すことにはならないだろう。単独のみうから信頼心を抱きながら、とにかく逃げた。あまのいれにとびこんだ。私は避難者にまじって、鉄椅子のシャッターの穴を通してみる外の光景から眼をそらすことばかりであった。私の胸は恐怖にみものいていた。

鼓膜を破る銃声、銃剣の音、鉄棒をふりまわす音、これの命が断ち切れる悲鳴は阿鼻叫喚を正確に説明してくれる。

逃げみくられた七十歳位のおいじいさんの後頭部に、空挺兵

の鉄槌がくだった。老人は悲鳴をあげてひまをなく倒れた。口と顔からまっかの鮮血が噴水のように噴出した。

私はどうすればよいかを知らない。わけのわからぬ戦慄がはしった。身ぶるいがとまらない。とぼりにいた婦人が足をとばしていった。そのまま棒のように倒れてしまった。

弱き者の嘆息。弱きところを訴えるところも弱いその弱きもののいきどおり。

二人の空挺隊員は、首に縄をかけた大のようにはっぱられてきた女の人は壁際に近い妊婦であった。

「このあまめ、壁に何がはいつている」その女は何を言っているかさっぱりわからぬ様子だった。手には何も持っていないのだから。

「このあまめ、知らぬいの？ 男の、女の」とよりや運がたりちらすのまわいて私ははじめに信じた。女の人は壁のむくような、ことばに知らぬいようなまなざしを覗きこむ。

「それじゃ、わからせてやろう」彼女が抵抗する間もなく、リンゴースがひまを裂かれ、肉俵のあちちにぶった。空挺兵は刀剣を彼女の大きなあちちをさつとこした。内臓

がとび出た。彼らは再び彼女の下腹を尊厳として胎児をいっぱり出し、まだ動いている胎児を彼女に投げつけた。とうてい信じられないこと、あるはずないことが私の目の前で展開されている。いっしょに見ていた人たちは、みな身ぶるいし、歯ぎしりし、こぶしをにがりしめて噴きだす耐えのわていた。

私は無意識のうらに神を呼んだ。「神よ、これをばんとすればよいのでしょうか。この善良な血がまけとる懸崖は何なりでしょうか。この者たちにはまことにこの國の国土防衛という業をばり果業に共に参加している大韓民國の軍人なのではないか」「抵抗することのできない自分の自尊心をみせてつらい人間の姿が破壊されたとき、おれだけ自分に對して幻滅をみげえたいのではない。

我儘が過ぎ去ったのは、鮮血と破れと汚物と噴きだす乱暴していった。「まよ、どこに行きますか」

「私は再び十字架を釘づけされるためにローマに行く」「ローマ軍に無差別屠殺される初代キリスト教徒の死を見て逃げて行く便箋のテロにむかっ、アイエスほ語った。

神を信ずるといふ理由のために権力を踏みにいられ、死

えと寒さにふるまえながら権力と武力の前で殺されていく彼らの命は一銭の価値もないかもしれない。ペテロをはじめ多くの信徒たちは、ローマにむかってます彼らが十字架に釘つけられるべきだと決断を下し、逃げま足もローマにむけた。その歴史的な転換。

光州市民の民主主義と統一に対する怒りが、民衆の怒り別大虐殺をほしいるまにする全斗煥一派にむけて闘いの大転換をした。

歴史がうまれて以来、この屠殺現場でも決してこのころみられなかったであろう惨劇をまた見せられた。女主人らしい三人の娘が空襲隊によって徐々に服を脱がされていった。フラジャールとインテリまで引き裂かれた。兵隊一人が軍靴の足で一人の娘のお尻をけった。「早くたちよれ。このあま、今がどんな時だと思ってる。デモが何だし怒り狂うあみのみのように叫びだした。娘たちは動かない。逃げぬのはなく、みな胸を打って座りこんだ。私は彼等が早く逃げることをどんなに祈ったか。しれない。しかし彼女らは凍えついたように地面に座りこんで離れない。兵隊一人が叫んだ。「あまたち、生きてくれないらしい。それいよいよだわい」

瞬間、娘たちの背中には刺剣が

深くさされた。鮮血の噴水がほとばしり出た。前かがみに倒れた娘たちの胸を十字架に無数にさし、生死の確認もしないまま清掃車に投げこんだ。

このときであった。逃げていた市民たちの逆襲が始まった。市民の興奮した絶叫は天地を震憾させた。だれの口から「市民よ、立ちあがれ。われわれの息子たちが殺されています。ハンマーであれ、くわ、ひま、角木であれなんでも持って闘いましょう」ウワーと叫ぶ喚声とともに市民の隊列がふくれあがってきた。闘う姿勢にかわった民衆の怒りは、興奮した獅子舞のようであった。私は逃げた。一晩中銃音がひびいた。

へ五月二十一日、高校三年生のあいが、一晩中火をピンの開いのすまきわらって帰って来たが、すぐまた出かけるうとするのを、私は無意識にとめようとした。「互に死に、兄弟たちがみな死んでいこうとするときに、私だけか生き残るためにかくれろというのですか」大きな声でもどりのえされたとき、自分の恥を感じ、ばすけんを知らなかった。出かけるあいの後姿にたのもしさを感ぜながら、神に祈りを祈った。

血を見た学生たちと市民の心は憤怒と怒みで興奮を極に達したのであり、市内の運転車という運転車がそれぞれ車に乗って来て、デモの群衆を乗せてカーパレードをくりだ

げ始める。街路にはいかに行くとも切れ目なく市民が出てデモの群衆に拍手と歓呼で激励を送り、若人はわれ先じ車に乗った。高速バス、市内バス、雇用トラック、装束車、ブルドーザー、警備車、将軍専用防衛車、給油車も見られる

いびきでまゝ軍用教官が動員されたのであり、アジア自動車工場の整備員数人が飛び出て故障した車両を整備し

ふたたび動かした。列をつくるデモの車両にかソリンを供給するのを惜しまなかつた。車両ごとに血で書かれたプラカードと、乾いている鮮血が流れぬろろ車体のスローカー

ンが市民の心を揺り動かした。「殺人鬼、金斗煙をたたき殺せ」「雀麦夏と申銘礪を遠放せよ」「金大中化を親殺せよ」「戒厳令を撤廃せよ」といふ鮮血で書かれたプラカー

ドとともにあれわれの旗は、彼らの手で組むの車で燦らんとはためいていた。

アスファルトの上になびりついているあの幼き者の血、道ばたに裸のままに放置された幼い少年たちの遺体を見てただ黙って見物していられようか。恐怖と興奮の都が、破

壊と殺人が乱舞する街、火の柱がいたるところで天を覆い、一切の放送は中断され、ニュースが遮断された暗黒の孤島。しかし、市民たちの胸は熱かった。

民主守護のために身を捧げると起る上がった若人の憤怒にふきあがる涙、血に染った胸。彼らは顔に血書をしたために鮮血をまき、のどが裂けんばかりに叫ぶ。髪はわれらの隣人、貧しく素朴な汚れた子どもたち。早くも車両は

女学生やおぼさんたちも合流していた。叫び、叫びつづけるのどがのびてきこえもしない声で民衆に向かって涙の訴えをする幼き子どもたちの絶叫に、私はついに泣いてしまった。

車に乗れなかつた市民は、われ先に握り飯をつくり、飲料水を研ってきた。食べ物、飲み物を与えるのに惜しいものは何もなかつた。ある店の七十歳位の老婆は陳列してあ

た食物を全部そのままかき集めた。卵、パン、コーラ、牛乳、ジュースなど、あるものは全部をあげたようだった。その箱を老婆は持ち上げられなかつた。私はそれを持ち上

げ、走っている車を止め、車の中に押し入れた。手かもちの顔には、たたかいて死のうという覚悟がみなぎっていた。食べ物を準備できなかった婦人たちは一様に水桶を持

ってきて彼らの顔をふいてやり、水を口にそそいで、やって

いる。一心不乱に疾走する車の間隙で、危険をかこりみずみずにもに生命を捧げる血と怒りの闘争であった。背甲をこすりながら激励する人、薬とドリンク剤を持ってきた薬剤師たち、全身の魂をこめて拍手と激励を送る人波、人波。

へ五月二十二日、催流弾の刺激的な毒気があたり一面に充満し、目をあけては歩くことのできない熱気を帯び、感さると化した都心は、そのまま修羅場としかいいようがない。デモの群衆のたたかいが激烈になると、ふたたび戒厳軍の無差別発砲が加えられてきた。あちこちで悲鳴をあげて倒れていく若者たちの数を数えられようか。市民は火山地帯を連想させる錦南大路通りに集まり始めた。三十人以上と推定される巨大な人波が大通りを埋めつくし、長蛇の列をなした。話にだけほきいていたパッパ、フオグ（こしよ、弾）の威力がどんなものかをはじめて知った私は、続けざまに出るくしゃみと流れる鼻水や涙をぬぐいながら、群衆の間に割りこんで行った。

戒厳軍の銃口からはふたたび火が吹きはじめた。装甲車の上でスローカンを叫びだした中学三年ぐらいの少年が、顔と腹帯から赤い血を吐きながら倒れた。群衆に向って降

りそそぐ実弾は、雨あられのように降りしきった。私、前が指揮していた青年が「アイグー」というひと声を發して倒れた。拍撃を用意できなかったデモ群衆は、背中に背負ったり、角材で拍撃をつくって患者や屍を運んだ。

銃弾を避けようと退却する群衆に押され、ある路地を曲かったところ、そこにはもうひとりの大きな不幸が民衆を待っていた。広さ三メートルの狭い路地へ数千人が押し寄せたため、押されて踏まれ倒れた人、その上にまた踏みかかかって踏みつけられ、五十数人の死傷者を出してしまっただ。私もこれで終わりだと覚悟して目をつむったが、奇跡的に生きていた。

「市民のみなさん！ 血をください。血がなくて患者が死んでいきます」 学生たちはマイクを通して声をかきりに献血を訴えてきた。あちこちで献血しようという男女が進みだした。「献血車」と血が書かれた救急車に乗せられて赤十字病院に到着した。病院に入ると、血なまぐさい臭気に吐き気をもよみした。病院の廊下や病室は患者でいっぱいだった。採血する空間がなかった。どろりした血を流すかみだたび車に乗り、他の病院へ向かった。揚林洞の橋があった。集まった群衆のなかの、ある青年が制止したひとりの



戒嚴軍に石を投げた。彼はなまなまよとぶつ倒れた。学生風の青年ふたりがその鉄かぶとをぬがせ、その場で頭をめつた打てにした。民衆は拍手をした。はいめつの復しゅうをしたという彼らの顔には勝利のよろこびが波打っていた。私の胸にも彼らと同じように、戒嚴軍ひとりわつつけたというふうな快な興奮がこみあげてきた。

へ五日二十三日、光州市内のすべての戒嚴軍は、外郭地に退却。道庁は市民が占拠した。デモ群衆は三十一(予備)師団、和順、松汀里(先山郡)、羅州、咸平などで武器を略奪してきた。銃が四千余丁、実弾が約五万発、手榴弾、カイアマイトなど、十分に戒嚴軍とたたかえるだけの武器を確保したということだ。重武装した軍人たちと対抗しなければ、尤死する者の数ばかりふやす無謀なことり、彼らは作戦を変えたためである。

いまや彼らの手には角材と工具、シヤベルと鶴はしのかわりにカービン銃、LMG小銃、手榴弾がにぎられた。

中学生の手には手榴弾がにぎられ、小学生がカービン銃を執った。

夜に帰っていた子どもたちは半後にはまたもどつてきた。

明け方の鉄道に並んでいた死体の山を見てびくくりしてもどつてきたというのだ。市外へ抜け出ようとした群衆たちが戒嚴軍の銃弾に撃たれて倒れてしまったのである。

新任総理が光州に来るといふ報道をきいた。市民は大きな期待をかけ、道庁前に集まってきた。数十分の群衆は、熱い陽あしの中が五時間も待った。

市民は道庁の地下室から民体をとりだし、広場に並べた。思胸と自刺をもつて発砲を抑制している多くの軍警の犠牲を出したという政府の報道が、とれだけ嘘があるかを立証するために、火炎放射器によって識別もできないほどまっ黒いけいになった死体を総理の前に見せるやうつというつもりだった。並べられた死体は四百七十五体であった。これを見た市民はまた興奮した。

総理は、市民と会って対話しようという約束を無惨に反古にし、光州には足を踏み入れなぬまま、ふたたびソウルへ飛んできてしまったのである。戒嚴軍をたけ面談して行ってしまったのだ。『治安不在、無法の都府』「暴徒の牛耳る都府」といふ名を残して。

死体は、たぐい地下室に戻した。

怒りにたえられず、腹から内臓がとびだしているにもかか

わらう、あま青平は血が「自由という木は血を吸って音に」と書いていた。

へ五月二十四日、高空飛行してバウまくびらは、形は呼訴文、だが、内容は欺瞞と術策がためられた脅迫だった。放送内容もかえって市民の感情を激化させるだけで鎮めさせることはできなかった。

「政府は忍耐と自制で発砲できず、数多くの犠牲者となりました。市民のみならずは固定間諜や暴徒らに幻惑されています。一日も早く理性をとりもどし、家へ帰ってください。暴徒らと分離してください。何人かの負傷者はよく治療しています」などと凶悪化され硬直した嘘で市民をなだめすかそうとする「呼訴文」を握った市民たちは、憤慨せざるをえなかった。

恐怖の都市から逃避しようとして戒嚴軍の目をこけ、山を越え、川を渡り、市外へ抜け出ようという彼らに後姿は、たにかいが吹きよめられていったある敗戦國の避難民と異なるところがなかった。

現役将校たちも怒りをおさへきれず、身ぶるいしているこのむごたらしい事態がもたらした人命被害は、デモ群衆

の車両を指揮していた某大學生が伝えるところによると、射殺された人は千二百人、交通事故・銃剣などにより死んだ人は八百余人、合わせて二千余人をこえるというが、死体を確認してみない以上何もいえない。病院をうめている負傷者が血と医薬品が足りず死んでいくという。その数字はさらにふえていくものと予測されており、ある宗教団体では死傷者数を二十数万人と推算しているという。

目まといれば

鮮みにあがる

引き裂かれた旗

頬には熱い涙が

流れても流れてもあふれぬ

光州からの二つのレポートを送ります。「海外のみならず、人へは外国人記者に託された英文のレポート。」「引き裂かれた旗」は韓国語で「二の千まことこころ」長文の抄訳です。

### 水牛通信 号外

一九八〇年六月十六日発行 五十円 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方 ☎03-425-9658